聖　書：使徒 19：21〜41
説教題：アルテミス騒動
日　時：2014 年 6 月 1 日

パウロはこの第 3 次世界伝道旅行において、アジヤの最大都市エペソで伝道しました。まずユダヤ人の会堂で 3 カ月、ツラノの講堂に移ってから 2 年間、地道にかつ熱心に福音を伝えました。その結果、エペソの町には悔い改めのリバイバルが起こり、魔術を行なっていた多くの者が、その書物を抱えて来て皆の前で焼き捨てました。「こうして、主のことばは驚くほど広まりますます力強くなって行った。」（20 節）

今日の 21 節は「これらのことが一段落すると」と始まります。この言葉だけで、エペソ伝道は豊かに祝福されたことが分かります。エーゲ海をぐるっと囲む町々の中で、このエペソの伝道だけが残っていましたが、今やこの町での宣教も一段落するところまで来ました。そこで次に伝道すべき新しい世界に目を上げる時が来たのです。その時、パウロは御霊の示しによって、「ローマも見なければならない」と言います。ローマは当時の世界帝国の中心地です。この時にはすでにローマにはクリスチャンたちがいたようです。先に見たアクラとプリスキラもローマから来た人たちでした。そしてこの後、パウロが書くローマ人への手紙から分かることは、彼がローマに行こうとしていたのは、さらにその先のイスパニヤすなわちスペインに伝道するためです。使徒の働き 1 章 8 節の「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで！」との主イエスのご命令に従って、当時の世界の西の果てまで福音を携えて行こうとするパウロだったのです。

しかし、その前にまずマケドニヤとアカヤを通ってエルサレムに行くこととしたとあります。なぜでしょうか。一つにはマケドニヤとアカヤは、第 2 回伝道旅行で宣教した地域です。その地方を回って信者たちをフォローアップしようという目的があったのでしょう。そして今一つ大きな目的は、異邦人諸教会から献金をあずかって、飢饉のために貧しい状態に置かれているユダヤの諸教会を助けるためでした。ローマ書 15 章でパウロは、ローマを通ってイスパニヤに行きたいという志を述べた直後に、こう言っています。「ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醵金することにしたからです。」パウロは困窮しているユダヤ人を見捨てて、ただ世界宣教を！というビジョンに向かって行く人ではありませんでした。彼はユダヤ人教会と異邦人教会が主にあって一つに結ばれて歩むことを大切に求めた人でした。そのためにまず異邦人諸教会からの愛の献金をもって、エルサレムに引き返すことを優先したのです。それは御霊が示した御心でした。それからローマへ、そしてスペインへ、という志を持っていたのです。

さて、ところがでした。パウロがそのように考えていた頃、エペソの町に大騒動が起こります。銀細工人のデメテリオが同業者たちを集めて、パウロに対する怒りをあらわにしたのです。何を彼らは怒っていたかと言えば、一言で言えば、パウロのせいで我々の商売はあがったりだ！ということでした。デメテリオは銀でアルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかなりの収入を得させていましたが、商売が傾いて来た！パウロが手で作った物など神ではないと言っ

て、人々を説き伏せ、迷わせているので、人々は銀細工の模型を買わなくなった！このエペソには周辺地域からも多くの人々が参拝に来ていたでしょうけれども、アジヤ各地から来る人たちも買わなくなってしまった。これはいかにパウロの福音が、このエペソいやアジヤ地方全体に大きな影響を与えたかを示すものでしょう。デメテリオは、「これでは我々のこの仕事も信用を失うばかりか、大女神アルテミスのご威光も地に落ちてしまいます！」と演説します。すると当然のごとく、職人や同業者は怒ります。自分たちの生活の中心であるアルテミスが軽んじられたら大変なことになる。自分たちの生活がひっくり返ってしまう。そこで彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ！」と叫び始めます。そして町中が大騒ぎになり、人々はパウロの同行者であったマケドニヤ人ガイオとアリスタルコを捕らえて一団となって劇場になだれ込んだのです。

パウロはこれを知って集団の中に入って行こうとしましたが、弟子たちがそうさせませんでした。またアジヤ州の高官もパウロに使いを送って劇場に入らないように頼みました。パウロはこのような高い位にある人をもエペソで勝ち取っていたことが分かります。彼らが入らないように忠告したのは、この集会は収拾が着かない混乱状態に陥ったものだったからでしょう。大多数の者はなぜ集まったのかさえ知らずに、ある者はこのことを叫び、他の者は別のことを叫んでいる有様だったとあります。

そんな中、33 節には「ユダヤ人たちがアレキサンデルという者を前に押し出した」とあります。この人たちとはどういう人たちなのでしょうか。この騒ぎはもともと、パウロたちに向けられたものでしたが、色々な人が巻き込まれるにつれて、次第に反ユダヤ人運動という性質を帯びて行ったのでしょう。そのため、エペソに住むクリスチャンではないユダヤ人たちがビックリしたのです。そこで彼らはアレキサンデルを前に押し出して、自分たちはパウロやキリスト教徒は一切関係がないと弁明したかったのでしょう。しかしエペソ人たちはそのことに何の注意も払いませんでした。彼らにとっては、アレキサンデルはユダヤ人であって、アルテミスを拝まない人だということだけで十分でした。そのため、これは逆に火に油を注ぐようなこととなってしまい、会場は一瞬静まった後、一層の興奮状態に包まれてしまったのです。人々は「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と再び力を込めて叫び始め、2 時間にも渡ってこの状態が続くことになったのです。

その内、町の書記役が出て来ます。彼はこの町を治める責任ある立場にある行政官です。彼としてはいつまでもこの騒ぎを放ってはおけません。放っておいたら、自分の立場上、大変なことになります。彼は群衆を押し静めて、4 つのことを語ります。まずその一つは 35〜36 節。一言で言えばアルテミスは大丈夫だという意見です。そんなに躍起にならなくても、アルテミスの栄光は歴然としている！と。銀細工人たちは、実はそれが危ないということを売上金の数字から知っていますが、町の書記役はエペソ人のプライドに訴えます。何もそんなに慌てなくても、我らがアルテミスはそんなことではびくともしない神である。いちいち騒ぐのははしたない、と。民衆は行政官の一言で満足します。「そうだよ。良く考えてもみれば、こんなに世界的な宗教であるアルテミス崇拝がすたれるわけがないではないか」と。そうして人々はとりあえず落ち着き始めたのです。二つ目は 37 節にある通り、「皆さんがここに引き連れて来たこの人たちは、宮を汚した者でもなく、私たちの女神をそしった者でもないのです。」というこ

とです。すなわちマケドニヤ人ガイオとアリスタルコは何も罪を犯してはいないということです。そしてこれは単にこの二人に対する言葉であるだけでなく、キリスト教に対する言葉でもあったでしょう。書記役は、この人たちを断罪するための正当な理由は何もないと言っています。第 3 点は、もし訴えることがあるなら正式な裁判の手続きを経なさいということです。それによらずにただこんな騒ぎを起こしても、何の解決にもならない。そして 4 つ目は、もしこれ以上騒ぐと、正当な理由がないのだから騒擾罪に問われる恐れがあるということです。もしこの騒ぎがローマに知られてしまったら、ローマ帝国に対する反乱行為、ローマの平和を破る行為と見なされて、この町の自由都市の権利もはく奪されてしまう、と彼は警告した。もちろんそうなれば彼の首にも関わる問題となったでしょうけれども。こうしてこの騒ぎは収まることになります。人々は何事もなかったかのように解散し、帰途につきます。パウロたちにも結局、何の害も及びませんでした。そしてパウロは自らの意思によって、次章でこの町から出発して行くことになるのです。

以上のこのアルテミス騒動は、私たちにどんなメッセージを語っているでしょうか。一言で言って、これは「福音の力」について語るものでしょう。あのエペソの町全体が大騒ぎになるほど、福音は力を発揮しました。アルテミス神殿の銀細工人たちの商売に深刻な影響が出るほどの力を発揮しました。人々は福音に触れて、エペソの神殿の模型を買わなくなったのです。手で作った偶像は空しいと考えるようになったのです。イザヤ書 44 章 9〜11 節：「偶像を造る者はみな、むなしい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だれが、いったい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鋳たのだろうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおののいて共に恥を見る。」デメテリオは 26 節で「あのパウロは、手で造った物など神ではないと言っている！」と声を荒げましたが、これは小学生でも分かる事実です。人間が造った物は人間以下でしかない。そのこともわきまえずに叫んでいること自体、彼らの知性が暗きに覆われていることを露呈しています。しかし福音に触れたエペソ人は、この霊的な暗さから救われました。そして空しい偶像ではなく、イエス・キリストにおいてご自分を現わしておられる生けるまことの神と共に歩む喜びの生活へ変えられたのです。

この大きな変化のために大騒動がエペソで起こったのでした。注目に値することは、この記事の中でキリスト教福音の宣教者たちは何も不正なこと、非合法なことはしていないと言われていることです。デメテリオたちは力づくで訴えようとしましたが、罪に値するようなことは何もなされていません。むしろこのまま行けば罪に定められるのはデメテリオであり、エペソの信じない住民たちの方でした。彼らは暴力的に振る舞っています。しかしキリスト教がしたことは、地道に福音を伝えただけです。もちろん人々の知性や感情や意志に訴えかけるように話しますが、あくまで礼儀を保ってそのことをします。このデメテリオたちが巻き起こした騒ぎに比べれば、はるかに静かな方法で。聞き手の人格の尊厳を尊びながら。その結果、聞いた人々が生き方を変えたのです。これはまさに神のことばが持つ力の現れとしか言いようがありません。

そしてこの記事で印象的なことは、エペソ人たちが「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」

と繰り返し、延々と叫び続けたことです。2 時間ばかりもこの大合唱が続きました。しかしそれは空しい叫びにしか聞こえないというのが、この箇所を読む私たちの感想ではないでしょうか。それは大声で他を圧倒するような叫びだったかもしれません。しかし集まった人々は、なぜここにいるのか分からないような人たちが大多数でした。また一時的に盛り上がったとは言え、すぼむようにして終わったものでした。そしてもしこの叫びが真実なら、アルテミスの威光は今どこにあるのでしょう。彼らが大声で一生懸命叫べば叫ぶほど、真に偉大なのはアルテミスではないということ、むしろパウロたちが伝え、多くのエペソ人たちを勝ち取ったイエス・キリストの父なる神であることを浮き彫りにするものだったのではないでしょうか。

私たちにとってのチャレンジは、あのアルテミス神殿を擁するあのエペソの町さえ、福音によってこのように変えられたということです。世界七不思議の舞台である異教色が強いエペソにも、福音はこのように浸透した。であるなら、私たちの町にも福音はこのように大きな力を発揮し得るのではないでしょうか。もちろんそれは簡単ではありません。これはパウロの 3 年間に渡る熱心かつ地道な努力が先立ってのことでした。またこの大騒動に象徴されるような福音に対する激しい反対活動も予期しなければなりません。しかし福音の言葉は異教の地域さえも新たに造り変える力があります。人々の心を変え、町全体を変えることができるものです。エペソで起こったように、私たちのこの町でも、福音を通して主がみわざを行なってくださることを求めて、私たちの教会が、また一人一人が、御言葉を宣べ伝える器として用いられることを主に祈り願ってまいりたいと思います。